

僕の彼女と寝てみませんか？

—— 椎葉学園三A、江崎沙緒 ——

な
つ
め

な
つ
め
夏目 棗

□□注意事項 □□

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 江碕 沙緒(えざき すなお) || 身長 .. 152 cm、体重 .. 45 kg、スリーサイズ .. 84 (Cカップ) ・ 57 ・ 82。 椎葉学園(しいばがくえん)三回生。

『名は体を現す』……を地で行く『素直(すなお)』で真面目な優等生。学生自治会の会長であり、部活動は陸上部の短距離のエース。尤も、共にもうじき夏休み前で引退する事が決まっている。秀でた広い額と眼鏡がチャームポイントだ。



《これは前半部分を収めた体験版です》

江碕 沙緒(えざき すなお) 椎葉学園三回生。一つ歳上の先輩で僕の彼女だ。『名は体を現す』……を地で行く『素直(すなお)』で真面目な優等生。更に学生自治会の会長であり、部活動は陸上部の短距離のエースだ。尤も、共にもうじき夏休み前で引退する事が決まっている。そして、部活の為にショートカットにしていた髪を秋口からは伸ばしたいと、ハニカムのように笑う。

彼女とは去年の秋から付き合い始め、その年のクリスマスに初エッチをプレゼントして貰った。その後ひと月くらいは週一程度だったが、最近では殆ど毎日エッチしている。

学園の帰りに毎日彼女は僕の家へ寄っていく。彼女を一目で気に入った母が僕の勉強を見て貰うように頼み込んだのだ。勿論、家庭教師代を固辞した彼女に、僕は代わりに身体で奉仕をしている……と言うのは冗談だが、勉強の前にベッドに直行するのが最近では僕たちの日課だった。

ベッドでの彼女は見た目どおりに慎ましやかで、階下の母を気にしてかいつも必死に声を堪えている。それでも、フェラチオでさえ最初から厭がる素振りも見せずにし

てくれた。最初の頃は流石にたどたどしかつたが、最近では口だけでイカされそうになつて慌てる事もしばしばだ。僕の家でスル場合は、『一日一回射精(だ)したらお終い』(その後は賢者タイム……いや『お勉強タイム』である)が暗黙の了解だったので、僕としては必死に堪えて挿入になだれ込むのが常だった。

スポーツで鍛えた彼女の身体は引き締まっていますが、しなやかで柔らかく、適度なポリュームの乳房も、きゅつ、とあがつたヒップラインも、揉んでいて飽きないし、何より『あそこ』の絞まりは尋常でない。いや、勿論、僕は彼女しか知らないけれど、そういう事に詳しい友人たちの猥談を通して多分そうだと思っている。

キスも初めてだったのか否かは確証はないが(『き、キスくらい……経験済みを決まってるでしょ!』と彼女は言い張っていたのだが)、僕と初めて唇を重ねた彼女が震えていたのを知っている。それに、何より初エッチのベッドで僕は彼女の『純潔の証(あかし)』を確認している。しかし、フェラチオ同様に今では彼女から積極的に舌を絡ませ僕の唾液を啜る程だ。学業同様飲み込みの速さと吸収力でベッドでも近頃は僕を圧倒する程である。

文武両道に秀でて、美人で性格も良く、僕の事を好きだと言ってくれて、エッチを拒まれた事も一度たりともない。そんな彼女に不満があるとすれば……それは、逆に

彼女からエッチを求められた事が一度もない事だろうか。

彼女は学園でも指折りの才色兼備な優等生で、正直、未だに「何故？」という思いが強い。だって、何の取り柄もなく、さして顔もスタイルも良い訳でもない僕なんかと、どうして付き合うようになったのか、未だに信じられないからだ。

彼女は『君が最初に告白してくれたからだよ』と言ったが、それは嘘だ。何故なら玉砕した友人や先輩を僕は何人も何人も知っているからだ。その内の一人は僕の親友だし、その玉砕の現場を陰から見届けているから間違いはない。

そもそも、学年も立場も違う彼女と僕との間に普通なら接点など生まれる筈などなかったのだ。僕はいつも遠くから見詰めていただけだ。学生自治会の会長として颯爽と活躍する姿を。県の競技会でトップでゴールテープを切る雄姿を。

そう、僕はいつも遠くからただ彼女を見詰める群衆の一人に過ぎなかったのだ。あの日、無理矢理クラスの『学園祭実行委員』を押し付けられたりしなければ……。

とはいえ、同じ目的に向かって仕事をしていたとしても、所詮、僕など『駒』のひとつに過ぎなかった。それでも、学園祭までのひと月あまりを毎日遅くまで共に過ごし、その内、帰る方向が同じだった僕が彼女を家まで送るようになって、二人だけの

時間が積み重なってゆくに連れて僕の想いは抑えられない程に膨らんでいった。

そして、後夜祭のファイアーストームに包まれた高揚感の中で僕は無謀にも彼女に告白していたのだった。まさか、OKを貰えるなど想定外だったのだが。

だから、たぶんこれは、僕の劣等感からくるものだと思う。

汚される彼女を見たい。他の男子に犯される彼女を見たい。いつからか、僕の中でそんな黒い思いが大きくなっていった。振り払っても振り払っても、どんなに否定しても、その思いは夏の積乱雲のように僕の心の中で大きく膨れあがるばかりだった。

眼の前で、他の男子に犯されて感じ捲くりながら、その性行為の相手が僕だと信じて疑いもせず、僕の名を呼びながら絶頂の嬌声(こゑ)を荒げて達してしまふ彼女の姿を見た時、僕はきつと、彼女との交合では到底得られないエクスタシーを感じるに違いない……と、もう一人の『僕』が囁き続けている。

その悪魔の囁きを、僕は今日、実行に移すのだ……。

そう、僕は彼女にアイマスクを手渡し「目隠しプレイをしよう」と声を掛ける。勿論、彼女が厭がるのは想定内だが、基本的に彼女は僕の願いを拒まない。いや、真面

目な彼女が拒めないように誘導するのは、実は、結構容易い。さあ、ベランダの外には、僕の親友が期待に胸を……いや、股間を膨らめて待っているのだ。そう、彼こそ玉碎する現場を隠れて見届けた僕の親友に他ならない。

ほら、階段を登ってくる彼女の足音が聞こえる。早速、始めるとしよう……。

*

「ごめんね……はあ、はあ……遅くなっちゃった……」

多分、彼女の事だから早足で来たのだろう、胸に手を当てて乱れた呼吸を整えるようにして言った。

「……自治会のお仕事も……はふう……この夏休み前で……お終いだから……ホントにごめんなさい……」

「平気さ、先輩の上気した顔を見ただけでお腹イツパイですっ♪」

「もおうつ！……すぐ、話をそういうえつちな方へ持ってくんだからっ！……それよりも……お母さま、いらっしやらなかったから勝手にあがってきてしまったけれど……よ、良かったかしら？」

「うん、今日は教室の日だから……」

「んっ？……『教室』？……ああ、英会話の日だったわね……本当にご立派よねえ、幾つになられても向学心がおありになって……」

「だから今日は嬌声（こえ）を我慢しなくても大丈夫ですよ……」



僕のさり気ない指摘に、ぼんっ、と音が聞こえそうなくらい瞬時に真っ赤になった彼女は声を荒げて抗議する。

「——って、いつも我慢なんて、し・て・ま・せ・んっ！……あ、あれで……ふ、普通……なのっ！……もお！……ホントにえっちなんだからっ！」

そして、剥れた顔のまま彼女は学生鞆を開けてノートや筆記具などを取りだしながら白々しく話題を逸らす。

「さあ、お母さまを見習って勉強を始め…ま…しょう…………つて、何よう…その眼はっ？」

勿論、わざわざ僕が言葉にださなくても彼女には判っている事だ。最近では勉強の前にスルのがローテーションだからだ。そして、そのローテを『仕方なく』受け入れるという彼女のポーズも、最早ローテーションと言えた。

「はくくくっ！」

あからさまに大きな溜め息を吐いて彼女が視線を泳がせて口を開く。

「………やっぱり…あ、あれが……先い？」

(まあ、遅くなったわたしも悪いんだし…でも、最近えっちばかりしてる……)

「し、仕方ないわねっ！………そ、その代わり……す、す、スッキリしたら……べ、勉強もしっかりするのよっ！」

そして、僕は素直に頷いてから彼女の耳元に囁くのだ。

「えっ？ ……なに？ ……目隠し…ふれい？ ………つて…なに？」

少し不安そうに彼女が訊き返す。

僕はもう少し具体的に行為を説明する。

「……うん……うん……ふ。ふうっ！……やだ、もおうっ！」

初めは笑いながら聞いていた彼女は、しかし、ついっ、と眼鏡を直して断言する。

「そんな……へ、変態さんみたいなコト……し・ま・せ・んっ!!」

勿論、それは想定内だ。だから僕はさり気なく話題を変える。

「ええ？……うん、明日から君は研修旅行だね……二泊三日よね……わたしも去年、二回生の時にちゃんと勉強してきたわよっ？」

話題がエッチから逸れた事で彼女が途惑っているのが判る。それでもしつかり釘を刺すのを忘れない。

「……だ、だから、君も……へ、変なコト考えていないで……真面目にお勉強してくるのよっ！」

「すぐお姉さんブルんだから……」

僕が、ぼそっ、と口にだすと彼女はあからさまな咳払いをして言った。

「う、うんっ！……わたしは、君より、ひとつお姉さん・な・のっ！」

何気にエッチ系の話題から逸れていった事で安心しきっている彼女に僕は揺さ振りを掛ける。

「二晩(ふたばん)僕が居なくて困るでしょう？」

「……つて……何が、困るの？」

本気で判らないようで、きよとん、とってしまった彼女に僕は話題を戻す。

「だからね、目隠しプレイをしておけば……ほら、僕が留守の間にオナニーする時のイメージ作りになると思うんだよね……」



「——つてーっ!?!……し・ま・せ・んっ!……お、お、オナニー……なんて……」

瞬時に、かあーっ、と真っ赤になつて怒りだした彼女が、しかし、明らかに動揺しているの見逃さず僕は畳み掛ける。

「確かに最近は毎日エッチしてるから僕もオナニーなんかしないけどね……」

話を『彼女のオナニー』から『僕のオナニー』に切り替えた事で彼女に途惑いが生
まれた。

「え？ ……そ、そりやあ……最近は……ほ、殆ど毎日……き、君と……え、えっち…
し、してる…わよ……ね……」



毎日の行為が脳裏を過ぎったのか動揺した彼女が言わなくても良い事まで口にする。

「だ、だだ、だつて……き、君が…し、したい……言うん…だ…ものう…
や、やっぱり…さ……ほ、ほら、君くらいの年頃の男子…その……ま、毎日だつ
て……し、しし、したい…ん……でしょう？」

自分から話し始めた内容が彼女を更に追い込んでゆく。

「だ、だからね……ここ、拒んだりしたら……可哀想かな……って……そ、それに……さ……ぬ、ぬ又う、抜いた……方が……その後で……べ、勉強だって……身が入る……み、みた……いだし……さ……」



頬を真っ赤に染めて声を裏返し、彼女は益々ドツボに嵌まってゆく。

「うん、うん……先輩のお陰だね……ありがとうございますっ♪」

「ば、ばかあつ！……そ、そこは……お、お礼を言うトコじゃないわよおっ？」

そして、僕は何食わぬ顔で『主語』を彼女に戻す。

「でも、先輩だってスッキリした顔してるよっ♪」

「ば、ばか、ばかっつ！……し、し、知りませんっ!!……そ、そんな…コト…」

(わ、わわ、わたしも……し、した後って…そ、そんなに……す、スッキリした顔してるのうっ?!……や、やだ、ヤダーっ!!)

「正直に言わないと……もう、してあげませんよ……」

「……そ、そんなコト言つて……し、したいのは……き、君の方…でしょ？」

「女子にだって性欲はあると思うけどなあ……」

一人称から三人称に変えて彼女の答を誘導する。

「……そ、そそ、そりゃあ……あ、あるわよ……お、女の子だって……せ、性欲……く、くらい……」

しかし、慌てて彼女は言い訳するように付け加えた。

「だ、だだ、だけど……お、オナニーなんて……し、しない…モン……」

「……」

「……ほ、ホントだって……な、なによお?……そのジト眼はくっ!」

「クラスの女子の話だと『週に二、三回が女子の平均』だって言っていましたよ？」

こういう話題が苦手な彼女はあっさりと僕の誘導尋問に引っ掛かる。

「——って!? ……う、嘘よお!? ……わたしそんなにしないモンっ!!」

早口で捲くし立ててから、はっ、と気づき頬を真っ赤に染めて俯く彼女はとても歳上とは思えないほど可愛い。

「……………わ、判ったわよお!! ……し・ま・し・たっ!」

「何を……………ですか?」

「……………だ、だから……………お、オナニー……………」

「いつからしてるんですか、オナニー?」

畳み掛ける僕の問いに彼女は正常な思考力を失ってゆく。

「えーえ!? ……い、言わないと…ダメくえ?」

勿論、平常心の彼女なら笑って拒む答をその口が搾りだす。

「……………だ、だからあ……………き、君とさ…付き合う…前に…ね……………そ、その…興味本位で

……………二、三回……………」

「…………………………」

僕はジト目で彼女を追い詰める。

「ほ、ホントだよっ! ……『週に二、三回』なんて、ない、ないっ! ……そんなにしないよう……………しないってっ!」

「僕とエッチしてからはどうなんですか？」

「え？………た、たまに………か、かな？」

思わず莫迦正直に答えてしまつてから、彼女は慌てて付け加える。

「……だ、だけど………最近は………ほ、ほら、殆ど毎日………君と………その………し、しし、して
るから………じ、自分でなんて………もおう、ぜくんぜんっ！」

語尾は照れながらも朗らかに言い放つた彼女はドツボに嵌まっている事に気づいていない。

「それじゃあ、やつぱり僕が研修旅行で二泊三日も留守にしたら、したくなるんじゃないですか？」

「——だ、だからあ………ふ、二晩会わないから………じ、自分でなんて………し、し、し………し・ま・せ・んっ!!」

「いや、イメージプレイは大切ですよ………してみましようよ、オナニーっ！」

「………はあっ？………いい、いいい、いややお!!………き、きき、君の前で………お、お、オナニー………なんてっ!!………む、無理いーっ!!」

「それなら僕もしますから、見せ合いつこしまししょうよ♪」

「はいいつ？………な、なに言つて………」

「だから、向かい合って二人でするんです、オナニーっ！」

「ぜ、ぜ、絶対に、い・や・で・すっ！」

真っ赤になつて拒否る彼女に、僕はさも落胆したように嘆いた。

「ごくんねんっ！……良いアイデアだと思つたんだけどな……」

主観を僕寄りに移した事で彼女に余裕が生まれ饒舌さを生んだ。

「最近の君って……ちよ、ちよつと 変態さんだよお！……この前だつて……お、お、おし、おし……お、おトイレ覗かせろ……とか……あ、あり得ないわよお！」

「そうかなあ……だつて、先輩のおまんこなら何度も広げて見せて貰つてるしい……だから尿道口だつてそのたび見てる訳だし……それに、舐めたり匂い嗅いだりもしてるから、放尿なんてその延長でしょう？」

「に、に、に、臭いっ！……ここ、ここ、ここ、今後……臭い嗅ぐの、禁止い！！」

頬を今日一番の朱に染めた彼女は、その時、唐突に『逃げ道』を見つける。

「あつ………ホントは君が、二晚会えないから……え、えつと……その……お、オカズが……ほ、欲しいんじゃないのう？」

思わず『オカズ』という到底彼女らしからぬ言葉を口にしたのも『逃げ道』を見つけた安心感からだったろう。

「やっぱり、バレましたっつ？」

僕が『失敗したな』……という顔をして見せると、彼女は歳上ぶって諭すように言った。

「……だ、だだ、ダメだよ……研修旅行は集団生活なんだから……お、オナニーなんて……し、したら……」

「それじゃあ、『オナニー』や『おしっこ』は諦めますが……『目隠しプレイ』くらい僕の『オカズ』にくださいね？」

『彼女の為のイメージプレイ』だった筈の行為を『僕の為のオカズ』に掘り替えて彼女の『逃げ道』を広げてゆく。勿論、諦めたのは『今日は』という意味だが。

「だ、だけど……う……」

(ど、どうしよう？……お、オナニーして見せるなんて……絶対に……無理よお……！……それなら、まだ……)

視線を泳がせて迷っていた彼女が遂に折れた。

「わ、わわ、判ったわっ！……し、しましよウっ……め、目隠し……ふれい……」

声を裏返して、そう早口で捲くしたた彼女は、やおら後ろを向いて服を脱ぎ始めた。その、何と言えば良いか……事務的に『脱衣』という『作業』をこなすみたいな

様子は、毎度の事とはいえ、些か興醒めである。

基本的に、彼女は僕の方を向いて服を脱ぐ事はしない。初めての夜など、シャワーを使ってから戻ったバスタオルの下には、ご丁寧にも下着を付け直していた程だ。しかも、部屋の灯りを消してからベッドに入り毛布の中で下着を脱いだのである。折角クリスマススイートを予約したというのに……ね。

ついでに言うなら、どうも彼女はセックスは素っ裸ですべきであるという考えに固執していて（いや、素っ裸は悪くはないのだが）、半脱ぎやら下着を付けたままの愛撫などを極端に厭がる傾向が強い。（こういうのも『潔癖症』とかの一種なのだろうか？）

今では明るい部屋のベッドで素っ裸の大股開きでクンニまでしているというのに、僕は未だに彼女の下着を脱がせた事が数える程もないのだった。

《着衣のままでのセックス》——今日はその野望の為のステップなのだ。

「ストップ……ストップっ！」

下着姿になった処で僕は声を掛ける。

「えっ？」

少し途惑うような顔で彼女が振り返る。

(おっ♪…………今日のブラとショーツはちよつと可愛い♪)

学生自治会の会長である彼女は学園では殆んど飾り気のない白の綿パンだ。

「だから、ねっ? ……僕の脱がせる愉しみを全て奪うつもり?」

「ま、また、そういうコトを言うっつ! ……自分で脱ぐよう…………」



「それより、ほら眼鏡とって……………これをして……………」

僕は『脱衣云々』をごまかす為に彼女の眼鏡を外して用意していたモノを手渡す。

「えっ? ……それをするのう? ……アイマスク…よね? ……もおうっ! ……こんな

モノまで用意してえ! ……最近、君はえっちの時って、オジサン入ってるよお?」

「そんなコトは、ないさっ！」

「いいえ、入ってますっ！……こ、この前だつてさ……体操服とブルマに着替えろとか……さ……ぶっ、ぶっ……」

(ぜ、絶対……ぜったい、しないんだからっ！)



「……はい、付けたわよ……って、やだ……ほ、本当になんにも見えないっ！」

僕は、そつ、と彼女を抱き寄せて、何気に話題を逸らそうと耳元に囁いた。

「今日のブラとショーツ、可愛いですね♪」

「そう？……え、えへへ……」

嬉しそうにハニカんだ声を聞いて、もしかしたら彼女も二泊三日の別れを意識していたのかも少しだけ罪悪感が増したけれど、僕は予定の行動を推し進める。

「やんっ ♪……擦ったあいつ ♪」

多分、目隠しされた事で少し高揚している彼女の両手を後ろに廻して、僕は早く彼女のネクタイでその両手首を縛ってしまった。



「な、なな、なんで…縛るのよおっ!?!」

「自分でアイマスクを外すと困りますから、ねっ?」

「——って……そんなコト、しないわよーっ!」

(もおっ! ……ホント、オジサンだよお!)

不貞腐れた風に抗議する彼女の言葉をスルーしてその首筋にキスをする。

「やあんっ♪……擦りたい、ってばっ♪」

『目隠しプレイ』という非日常が彼女の体温をあげる。体育会系部活少女とは思えない真っ白な柔肌から彼女の仄かな匂いが香り立つ。当然の事だが学生自治会の会長として全学園生の規範たらねばならない彼女は香水など付けては居ない。けれど、微かに汗ばんだ彼女の体臭は甘やかに僕の鼻腔を刺激する。

「……すん、すん……」

首筋から鎖骨へと舌尖でなぞりながら鼻を鳴らすと、案の定、身を振って彼女が抗議の声をあげる。

「こ、こらあ〜っ！……に、臭い嗅ぐの、禁止だって言ったよう!!」

「それは、おしっこの匂いでしょう?」

「ばっ!?!……ばば、莫迦、ばかあっ!?!」

真っ赤になって僕の鼻先から逃れようと彼女が益々身を振る。

「ほ、他の…に、臭いも……き、禁止いっ!!」

「でも、僕は先輩の匂い、好きですよっ♪」

その言葉にまたも身を振った彼女は、しかし、『禁止』とは言わなかった。

「ばっ、莫迦くっ?!? ……え、えっちい……」

『了承』を取りつけた僕は鎖骨の上に《僕の印》を刻みつける。

「んっ?!? ……あ、んんう……や、やだあ、キスマークは駄目だっつてえ!?!?」

これも予定の行動だ。

これから、そうとは知らない彼女を僕の親友に抱かせる。

だからといって、この身体は《僕のモノ》だという《刻印》を残しておかなければならない。例え一度抱いたからといって、二度目などは無い事を彼に知らしめておく必要があるからだ。

「……むちゅっ……れろう……平気ですよ、ブラウスで隠れるトコだから……」

「だ、だけどう……明日は部活が……んっ……あ、あるモンっ!」

「普段の部活は体操着とブルマでしょう? ……競技会の時のあのエロエロな水着みたいなウェアじゃなければ見えますんって……」

「え、えろえろ……っつてえ!?!? ……いつも……そ、そういう眼で見てる……」

その抗議をスルーして僕は彼女をベッドに寝かせる。

「えっ? ……これで横になるの? ……ま、まだ……その……す、ストッキング……とか、脱がないと……し、皺になるから……」

勿論、パンストだけでなくブラもショーツも（彼女の的には）脱がなければならない。けれど、今日はその願いは叶えられない……だろう。

「し、皺が残ると……あ、後で、お母さまにお会いした時、困るう！」

確かに「女は目聡い」——彼女の帰り掛けに、必ず玄関まで見送りに出てくる母が『そういうトコロ』をチェックしているのを僕は気づいている。

「平気ですよ、今日は英会話の教室だから……」

「……うんっ！……もお、強引なんだからあ！……え、えっと、見えなくて不安だから、支えていてくれなきゃ厭よっ！」

彼女を抱いたままベッドに寝かせ、頭の下に枕を入れる。

「ん？……ああ、枕ね？……あっ！……君の匂いにするっ♪……すーっ、はーっ……少し、落ち着いた♪」

「先輩の方が余程匂いフェチですね？」

「……ば、ばかっ!!……し、知らないっ！」

押搦（からか）われた事で気持ちが下着を脱いでいない（彼女の的には不完全な状況である）事から逸れたのだろう、彼女が恥ずかしそうに言った。

「そ、それで、どういう風に……その……す、する……のう？」

「ここから……僕は、もう、喋らないですから……」

「ええっ？……な、何故よおっ？」

困ったように、いや、少し不貞腐れた風に彼女が抗議する。

「イメージプレイに集中して貰わないといけませんからね？」

「……だ、だから……いい、イメージプレイなんてえ……ひ、ひ、必要ありませんっ……
てばあっ!!」

非難するような彼女の言葉をスルーして僕はもう喋らない。

「もおうっ！……わ、判ったわよっ！……あつ、手を離したら、厭だあくっ……君が
何処か行つちやつたみたいで……ふ、不安だよう？」

けれど、僕は当初の予定を完遂するだけだ。

「……ね、ねえっ？……な、何してるの？……そ、そこに……いい、居
るよね？……居るんでしょ？」

僕はわざと足音を立ててベランダに歩み寄った。ここで足音を忍ばせれば逆に彼女の疑心を膨らませるだろう。思ったとおり彼女は視界をアイマスクで奪われた顔をこちらに向けて、自分で自分を納得させる為に僕の行動を口でトレースする。

「ああ、ベランダの戸を閉めるのね？……は、恥ずかしいからカーテンもきつ

ちり閉めてよう？」

勿論、実際は細く開けておいたベランダから、待たせてあった親友を導き入れたのだが。

彼は僕と眼が合うと困ったように視線を泳がせて部屋に一步を踏み入れた。早くも腰を退き気味に前屈みになっているのが可笑(おか)しかった。そして、ベッドに横たわる彼女のあられもない姿に気がついて、ちらつ、と僕を見返した。

僕が薄笑いを浮かべて頷いてやると、彼はもう迷わずベッドに歩み寄る。

「……………ね、ねえ、もうダンマリ？ ……な、何とか言ってみよう？」

不安そうに訊く彼女の耳にも近づいてくる彼の足音は聞こえている筈だ。僕はその足音に重ねるようにしてベッドの下方に予め据えておいた椅子に腰を降ろした。

ベッドの脇に立って、いぎ、と腰を屈めた彼が、ぎよつ、となつて僕を睨む。

『まさか、そこで見てるつもりか？』彼の非難めいた視線はそう言っているようだった。実際、僕が坐った椅子はベッドから一メートルと離れてはいない。

僕は『当然だ』とばかりに大袈裟に両手を広げて見せる。二人きりにして貰えると思っていたのなら、それは生憎だったろう。

そして、僕は『早く始めろよ』とばかりに顎をしゃくってやった。

しかし、彼はベッドの彼女に手を差し伸べ掛けたぎこちない体勢で固まってしまった。そのまま彼女と僕とを交互に見遣って、それでもまだ躊躇(ためら)っていた。

その時、彼女が焦れたように口を開く。

「……ね、ねえっ？ ……どうしたのう？」

そこに居るのが僕だと信じて疑いもしない彼女の声音が甘やかな響きを帯びる。そして、その桜色の唇から小さな舌先が覗き、乾いた唇を湿らすように、ちろりと舐め廻した。

それを見た彼の喉が微かに、ぐびつ、と鳴った。それが合図だったように覚悟を決めた彼がベッドに片膝を乗せる。

ベッドが、ぎしつ、と悲鳴をあげ彼女が身じろいだ。

「……………ひんっ!? ……び、びっくりしたあっ! ……い、いきなり、触るんだものおうっ……………つてえ……………し、し、下から…なのう？」

彼の指先が僕しか触れた事のない彼女の股間をパンスト越しに弄(まさぐ)っている。ぎこちなく余裕のない愛撫に彼女が焦れたような声をあげる。

「……………あんっ ♪ ……く、擦ったいい ♪」

(やあ〜んっ! ……ぱ、パンストの上から……………あ、あそこ(お尻)……………く、くにくにく)

してるよう！)

「ああっ、判ったくっ！……わたしがこの状況でえ……こ、こ、興奮してるか……た、確めるつもりね？」

彼女が焦れったそうに身を振りながら強気の発言をする。

「……ぎ、残念でしたっ！……まだ、濡れてなんかいないわよーだっ！……ほ、ほらあ、よつく見てみなさいっ！」

(……って、いやだ……わ、わたしったら……じ、自分から……お、お股を……ひ、広げちゃってる……よう!?!……は、恥ずかしい!!)

「あん、うっ……そ、そんな……あ、あそこ……なぞるみたいにい……ひいいんっ!?!……そ、そこはまだ、ダメーっ!!」

腰を、びくんっ、と跳ねさせた彼女の両腿がきつく閉じる。

(も、もおう!?!……いきなり……く、クリトリス捏ねるんだものおっ!……思わずお股で指を……は、挟んじゃったよう!!)

「ま、まだ……ぬ、濡れてないの……わ、判ったでしょう?……ね、ねえ……いつもみたいにい……き、キスから……しまししょうよう?」

彼の指をパンスト越しに挟んだままの股間を、もじ、もじ、と揺らして彼女が甘え

た声音で訴える。

それを聞いた彼が、ぎよつ、となつて僕を見た。『良いのか?』と唇が動く。今回の提案をした時に彼に約束させたのは二点だけだ。

彼女の身体に傷や痣が残る行為は厳禁だ。愛撫の一環として乳首を摘んだり構わないが、痕が残る程の強さや彼女が本気で厭がる行為に及んだらその場で中止にする。と念を押した。だから、キスマークも駄目だと言つてある。キスマークが判らないようだったので、笑いながら『ここに付けておくよ』と鎖骨の辺りを示しておいた。

もう一点は、《ぶつ掛け》禁止である。射精するなら口の中か膣の中だと言うと、彼はかなり動揺していた。更に、《生》で構わない、いや、必ず《生》でしろと伝えると彼は暫く、あんぐり、と口をあけたままだった。まあ、そんなヘタレの童貞クンだから彼を選んだのだが。

「……………ね、ねえん♪……………ちゅうう! ……ちゅう……したいい♪」

甘え、ネダルような声が聞こえ、彼に頷いてやるといきなり覆い被さつたので吹きだしそうになつてしまった。

「……………うぶうっ?! ……ふあぶぶぶ、おぶぶ、うぶう! ……(ちゅぶ、ちゅろっ) ……んぶっ…(ちゅむっ、ちゅびっ) ……はぶう……………」

いきなり乱暴に唇を吸われ、たどたどしく舐め廻されて、初めは途惑っていた彼女だが、直ぐいつものように積極的に責めに廻る。

——んぶう、えるつ、れるう……ちゅぴつ、ちゆるう……るろう、えろ、れるう……ちゅぶう、ぢゆるつ、れるつ……はふつ、んつ……はむんつ、ぢゅぶう、ぢゆるるつ……ちゅずつ、じゅぼつ、じゆるるつ……あつ、は、ふう……

僕でさえ最近ではすっかり主導権を奪われる彼女の卓越した技巧が卑猥な水音を狭い部屋に撒き散らす。覆い被さって上になっている彼が、まるで受けに廻り一方的に責められているのは少し哀れを誘った。

とはいえ、眼の前で自分の彼女が他の男子と本気のベロキスをしている——これはかなり興奮する。僕はズボンの中で痛いくらいに反り返った《逸物》を取りだして扱きたい情動を必死に堪えた。

「……うんむつ……（ぺちよ、ちゅば、ちゅぶつ）……んつ……んんう……（ぺちよ、ちゅぶ、にちゅつ）……んん……んくつ……（ちゅば、れろうう、ちゅばつ）……ね、ねえんつ……」

（なんだか今日の君のキスって……いつもの君じゃないみたい、どう？）

股間を弄（まさぐ）る時は股間だけ、キスを始めたらキスだけ、という単調さに彼女が焦れているように見えた。

「ねえんっ♪……お、おっばい……おっばいもっ♪」

学園でも一、二を争う美少女にこんなオネダリさせるとはけしからん話だが、僕は同時に奇妙な違和感も感じていた。

彼女に重なり纏れ合うように行為にのめり込んでいた時には、ついぞ感じる事がなかったのだが、エッチの最中(さなか)の彼女はこんなにもエロかったのだ。謹厳実直で知られる学生自治会会長の姿は何処にもなかった。

「ひゃああん♪……も、揉むか、ブラ外すか、どつちかにしてっ！……って言うか……し、皺になっちゃうから……ね？……脱が……は、外して……ね？」

(ブラも……し、下……とかも……じ、自分で……ぬ、脱ぎたかった……のにい……ぷん、ぷんっ!!)

彼女は僕の手で下着を脱がされる事をひどく恥ずかしがる。いや、嫌悪すると言っても良い程だ。彼女にとって、『下着を脱ぐ』という行為は『性行為』の前に済ませしておくべき行為なのだ。

「やだあつ！……せ、背中……ち、違うう！……ここ、これ……フロントホックだから……もおうつ！……この前、フロントホックの外し方、教えてあげたじゃないのおっ！」

そうは言うが実際に外させて貰った事は……(無いよっ！ 無いじゃないかっ！)

そして、勿論、童貞の彼が知っているとは思えなかった。

「……………あつ、やだあ！……………上に摺らしちゃったの？……………ま、まあ…いい、良い…
けどう？」

一々、僕との違いを指摘されているようで彼も面白くなかったのだろう。ブラを摺らした彼は乱暴に乳房を揉みしだいた。

「ひぎゅつ…う……………つ、強いい!?……………も、もつと…や、優しくう…いつもみたい
に優しく揉んでよう！」

(なんだか今日の君って……………キスもそうだったけど……………まるで……………?)

「あん、んんっ♪……………それ、いいっ♪……………乳房を、もにゅ、もにゅ、するのう……
き、気持ち……………好いよう♪」

(……………そうだわ……………まるで初めてののえっちの時みたいに……………夢中で……………がむしゃらで……………
…余裕がないみたいで……………いやだ、わたし思い出しちゃってる……………よう?)

「んん、んあつ……………ち、乳首も……………好いっ♪……………乳首い……………くにゅ、くにゅ、する
のう……………イイいんっ♪」

彼も少し余裕ができてきたのだろう。彼女の口端に垂れた唾液を舐めとりながら首筋に舌を滑らせていった。

その時、不意に彼は気がつく。彼女の鎖骨に印された《僕の刻印》に。その時の彼の感情は嫉妬だろうか。それとも諦念か。

「ひぎいつ！……ひ、引つ張るの、だめくえ!?!?……ち、乳首っ……ちくびい……引つ張るの、だめえ、ダメくっ!?!」

感情任せで行なってしまった行為に拒絶の言葉を返されて彼の手が止まる。それはたぶん『彼女が本気で厭がる行為に及んだらその場で中止にする』と念を押した僕の言葉が脳裏を過ぎったからだろう。しかし、童貞の彼には彼女の『ダメ』が言葉どおりの意味ではない事に気づくだけの余裕がなかった。

不安そうに手を離して、ちら、ちらっ、とこちらを見遣る彼を僕はシカトしてやったが、まあ、待つほどもなく彼女の方から焦れたように再開を促す声が聞こえた。

「……んっ、んんっ……ね、ねええん♪……あ、あれ……んっ……あれ、してえ?」

勿論『あれ』では彼は判らないだろう。彼がどうであるのか高みの見物と洒落込もうとしたのだが、彼女はあっさり答をバラしてしまった。

「ほ、ほらくっ……ち、乳首を……っ、爪の先で……かり、かり……って引つ搔くの……あ、あれが、イイのう♪」

(やだ、わたしったら……ま、また、えっちなオネダリ……し、してるよおっ!!……)

……はっ！……も、もしかして……わざと焦らせて……わたしに 恥ずかしいオネダリ
させようとしている……のう？)

彼女のお陰で彼が指示どおりにすると、嬉しそうに彼女が声を上擦らせる。

「あひいつ、ひいいん♪……い、イイいつ！……そ、それえ、好いのう♥」

(やああん！……こ、腰が……う、動いちゃううっ!!……き、気づかれなかった……
わよ……ねえっ?)

「……んっ、んんうっ……ああん♪……お、おべ口で 舐め……んんっ……舐め、なめ
も、好きい……んあっ♪……気持ち、好いよう……」

彼のぎこちない愛撫でも、漸く能動的に手数を繰り返らせるようになった所為で、次
第に彼女の官能も昂ぶってゆく。

「……ああ、ああん……乳首、イイっ♪……れろ、れろ、されるの……好きい♪」

勿論、彼女は僕に愛撫されていると信じ切っているからこそ昂ぶっている……のに
違くない。(……いや、そうだろ?)

「ひいああん♪……か、噛んじや……ひいっ!!……ら、らめくっ♪」

(やだ、やだあくんっ!……こ、腰が……跳ね……ちゃったよう!!)

その時、彼の片手が乳房から離れ、肌を伝って降りてゆく。そうなのだ。真っ先に

触り、見たかった《トコロ》をすっかり失念していたのだ。

彼女もそれに気づく。既に《ソコ》は鴉（しとど）に濡れてシヨーツに染みを広げている筈だ。

「ね、ねね、ねええ？ ……き、君のも…ほ、ほほ、ほら…してあげる…し、して…あ、あげるから…っ！」

自分が早くも興奮して濡れてしまっている事を知られたくなかったからだろう。彼女はかなり動揺した早口でその行為（フェラチオ）を申しでた。

僕には彼女の心情が手に取るように判った。そして、そんな冷静な僕の心裡とは裏腹にズボンの中で《逸物》は熱く滾（たぎ）ってゆく。

しかし、幾分曖昧な言い方だった所為か、一瞬だけ躊躇（ためら）うように止まっていた彼の片手はまた《あそこ》に向かって進軍を再開した。

それを感じた彼女が慌ててより具体的に申しでる。

「…ね、ねえってばあ？ ……お、おちんちん…ねっ？ ……おちんちん、してあげる…お、お口で…してあげるから…ほ、ほら…わたし、手が使えないから…ほらあ、おちんちんをね？ ……口のところに、ねっ？」

学園男子の憧れの的である学生自治会会長に、卑語連発でここまで言われて迷う男

子など居る筈がないだろう。

(あつ? ……ズボン脱いでるのかな? ……やだ…うふふつ……なんだか慌ててるみたい……あつ……来るかな?)

「……………ふぐつ!? ……も、もおう、やあねえっ! ……は、鼻に…あ、当たったわよお! ……う、うん…そこ…(えろう、れろつ) ……うふふつ♪ ……もう、先走りだえ、ぬるつぬろ、だよう? ……(れりゆ、えろろう) ……もしかしてわたしより君の方が…興奮してるんじゃない、な・あ・い?」

彼女の揶揄(からか)うような挑発するような言い方に(いや、慌てて鼻に擦りつけてしまった屈辱(からか)、彼は《ペニス》を握り直すと、彼女の唇を割り裂くように突っ込んでいた。

「おぶう!?! ……うぶつ、ぐぶう!?! ……(じゅぼつ、ぢゆるつ) ……ほんはひ「そんなに」…(えろつ、るろつ) ……ふひはふい「むりやりい」…(ぢゆずつ、ぢゆぽつ) ……ひはふへも「しなくても」……えほう、ぐぶつ……」

(もおうつ! ……怒ったのかなあ?)

喉奥まで無理矢理突っ込まれて軽く嘔(えず)きながらも、素直にしゃぶり尽くす彼女はまさに名前(沙緒)を体現していた。



「はぶ……う……(ちゅぶつ、ちゅぱつ) ……ん……(くりゅつ、くちゅつ) ……へえ「ねえ」……
(ちゅる、ちゅぶつ) ……ひほ「きもち」……(ずじゅ、じゅぶるう) ……ひい「好い」？」
(何だかいつもより……あ、汗かなあ……臭いがきつい……よう……こ、興奮してる……から
……かなあ?)

彼女の頭を掴んで腰を振り立てるたび、彼の濃い目の陰毛が彼女の鼻先に押しつけられる。興が乗ってくるのと彼女は僕の陰毛を口に含んで遊ぶが、今日だけは止めて欲しい。(いや、するなよっ！)

もつと辱められ、穢される彼女を見たいという思いと、こんな莫迦げたシチュエーションを設定した自分の愚かしさを呪う思いとの、二律背反する感情が僕の裡で、ちり、ちり、と鬨(せめ)ぎ合う。

——ちゅぶつ、くぶつ……はぶう、んんっ……ちゅぶつ、ちゅぱつ……あふつ……ぐぶつ、くちゅつ……れりゅ、えろつ……あふつ、はふつ……ぢゅろう、ぢゅるっ……ぐぼつ、くちゅるっ……ちゅぼつ、ぢゅるっ……

鼻から息継ぎの呼吸を抜きながら、口腔を占領する《汚物》を僕のモノだと信じて疑いもせずに熱心に舐め清める彼女の腰が微妙に揺れる。

——ちゅる、ちゅぶつ……はふつ……くりゅ、くぶつ……んんっ、んあっ……ちゅぼつ、ちゅ

ぶっ……ぢゆるるっ、ちゅぶぶっ……んっ、んっ……

(や、やだ……興奮してるのは、わたしも一緒だ……だ、だ、だって……しよ、シヨ
ツまで……し、染みてるぅ……)

後ろ手に縛られた上半身に跨られて口腔を犯されている彼女は身動きもままなら
ないのだが、その下半身が微妙に拗(くね)り始めている。

「……(ちゅぶっ、ちゅろう) ……んっ? ……(えろっ、れるっ) ……ううんっ?」
(……あれ? ……でも……う……)「れって……」

熱心に舐めしやぶっていた彼女が、ふと、何か違和感でも感じたかのように口腔か
ら一旦、ちゅぽんっ、と《ペニス》を吐き戻して途惑うように訊いた。

「……ねえ? ……あんまり気持ち好く……ないのう?」
「……………えっ?」

思いもよらぬ問い掛けに彼の口から微かな声が洩れ聞こえ、僕は焦って睨みつけて
やったが、彼は気づきもしない。まあ、幸い彼女も気づかなかったようだが。

「だって、なんだか……い、いつもみたいに大(おっ)きくなつて……いないでしょ?
……ほら、何て言うんだっけ……は、半勃ちい?」

今度は僕が吹きだしそうになって慌てて口を押さえた。そして、彼も僕の様子に気

づいたようで逆に睨み返してきた。いや、それはお門違いというモノだ。

「……………って、そんな筈……………あは、あははっ……………な、ないよ……………ね？」

(わたしったら、なに莫迦なコト言ってるのよう！……………こんなに硬くなってる……………じゃない……………よう?)

「……………め、目隠しをしているから……………そ、そう感じるの……………よね?……………あ、あはは……………うぶっ、おぶうっ!?!……………そ、そんなに、せつつかないでも続けるわよおっ!」

腹立ち紛れに押しつけられた彼の《ペニス》を僕のモノだと信じて疑わず、彼女が愛おしそうに啜え込む。

「あむうんっ ♪……………(じゅぶる、じゅるるるっ)……………んぐっ、うくん……………あふう……………」

可変(おか)しな事を言った詫びのつもりだろうか、彼女は先走りを音を立てて啜り、躊躇(ためら)いもせずに嚙下した彼女の喉が鳴る。

「おちんちん汁(じる)、おいひい【美味しい】……………(じゅるっ、ちゅぷっ)……………ん……………(じゅるるっ、じゅぶぶぶぶう)……………もっと、おちんちん汁(じる)う、ちようらいい【頂戴】……………(ちゅぶっ、ぢゅるるるうっ、じゅぽっ)……………んん、んぐっ……………(んぶぶぶぶっ、りゅろろ)……………」

性的行為にのめり込んでいる時の彼女は卑語連発である。いや、僕がそういう言い

方をするように仕向けた（躰けた？）のだが、今では何も言わなくても、彼女は学生自治会会長にあるまじき卑語をその可憐な唇から垂れ流す。それはつまり、彼女も興奮して昂ぶってきた事を意味していた。

いや、彼女以上に僕も昂ぶっていた。眼の前で自分の彼女が犯されているのを見るのがこれほど興奮するとは思ってもいなかった。彼が終わる前にズボンの中で放出してしまったら笑い話にもならないだろう。折角の『特等席』で観賞（いや、監視も含めてだが）している意味がなくなるというモノだ。

しかも、僕は余裕を示すつもりで『何発射精（だ）しても良い』とまで彼に宣言していたのだ。マジでヤバいかも……知れない。

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。

おまけイラストがあります↓

